支部長就任のご挨拶

小　出　章　二
（岩手大学農学部）

1. はじめに

このたび、2025 年 3 月までの 2 年間、農業食料工学会東北支部の支部長を務めることになりました。前支部長の張　樹槐先生はじめ、歴代の支部長、常任幹事、会員のみなさまが築いてこられた「東北地方における農業機械、農業機械化、農業施設及び食料・生物資源の工学的処理等、農業食料工学に関する学術の進歩発展及び普及」への多大な功績をベースとして、これからも学術価値を共有でき、これからの新しい時代に沿った情報を発信できる支部会として進展するよう努力いたします。なにとぞよろしくお願いいたします。

2. 農業食料工学会東北支部について

農業食料工学会東北支部（以下、東北支部）について私なりにレビューさせていただきます。東北支部は、1957 年 3 月 19 日に農業機械学会（現、（一社）農業食料工学会）での理事会満場一致の承認を得て設立されたものです。初代支部長は、農業機械学会の理事長をされていた東北大学の二瓶貞一先生がお引き受け下さり、半年後には弘前大学の森田昇先生が支部長を 1970 年度まで、その後は山形大学の土屋功位先生が 1982 年度まで支部長を就任されました。この支部創立からの 25 年が東北支部の礎を築いたのはいうまでもありません。支部報創刊号をみると二瓶先生から「稲作を中心とした農業機械化の推進に御努力下さるようお願い致します」とのご寄稿がございました。その期待を超えるかのように、（戦前は冷害による凶作地域であった）東北地方が日本の食糧生産基地として称されるようになったこと、これは本支部会の果たした功績の一つでは、と思っております。その後、時代は昭和から平成へと移り、ウルグアイ ・ラウンド農業合意、農業の担い手の不足・高齢化、耕作放棄地の増加、加えて TPP による価格競争と、農業を取り巻く環境は目まぐるしく変化し、それら難題に農業機械化の立場からご対応された支部会員の方も多かったと思います。さて、時代の推移のなかで東北支部において最大のできごとは 2011 年の東日本大震災とそれに伴う福島原子力発電所の事故であると申しても過言ではないと考えます。東北支部でも、太平洋側３県の研究機関が主となって農業や農地の復興などに取り組まれました（また現在も取り組まれています）。これまで復興にご尽力いただきました会員のみなさまに敬意を表する次第です。

話を近年の東北支部に移します。上述しましたように東北支部は農業機械学会の支部組織でありましたが、2013 年 9 月より親学会でありました農業機械学会は「農業食料工学会」に名称変更し、更に 2019 年 4 月より任意団体から一般社団法人に移行しました。これにより東北支部は独立した「新たな組織」として再スタートすることとなりました。とはいえ、東北支部の正会員は半数以上が農業食料工学会の正会員です。2021 年に農林水産省が策定しました「みどりの食料システム戦略～食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現～」にてうたわれているキーワード「スマート農業」（具体的には IoT や AI、ロボット技術などの先端技術の導入、農作業の効率化や省力化に対する技術促進）は、（一社）農業食料工学会の進むべき方向性と重なるものであり、それは本支部会の進むべき道を示しているものです。その意味では、東北支部はまさに時流にのっている学会といえるかと思います。

3. 東北支部のこれからを考える

さて、この東北支部を発展させていくために次のようなことを考えています。はじめに今年度より新たに役員に「将来計画担当」を置き、東北支部の将来について、ともに検討をす

る予定です。将来計画には若い会員をメインとしたワーキンググループを設けるかもしれません。このことにより、東北支部の将来像やあり方、問題点について考えていきたいと考えています。

そのなかで、現時点で検討したい課題を 3 つ紹介いたします。一つは名称である「農業食料工学会東北支部」の変更の必要性についてです。これからの東北支部を担う会員（および団体賛助会員）にとって今の名称が望ましいのか？あるいは関東支部、関西支部、九州支部が「ブロック名＋農業食料工学会」と変更したように、東北支部も名称を変更したほうが良いのか？変更するとメリットがあるのか？伝統ある今の名称がよいのでは？いろいろな声が聞こえてきそうですが、名称は学会の顔であります。慎重な議論が必要ですので、諸先輩の方々からも高所大所の観点からアドバイスを頂けますとさいわいです。

次に、会員勧誘活動についてです。1958 年時の会員数は 62 名だったとの記載が支部報第 2 号にあります。平成においては会員は 100 名を超える年も多かったのですが、現在は 80 名以下まで減少しており、なかでも学生会員が激減しています。このことは私たちが 3 年もの間コロナウィルス感染症による行動規制を受け、支部学会が中止になったりオンライン大会となったことによるものと思われます。自由闊達な議論の場を、若い学生・研究者に提供することは支部会の使命だと思われます。今後は、支部大会は対面（およびハイブリット）での集まりにもどると思われますので、大学に勤めている先生方々には、他の大学や組織の方々と交わることで得られる貴重な経験を、是非学生にお知らせいただければ、と思います。そのために、学生が東北支部大会に来やすい環境を創るべきだと考えています。例えば、支部大会の開催県にて学んでいる学生に対しても分野を問わず参加できる仕組みを創ること、「若手の会」の活性化、支部ホームページの充実、著者の依頼に応じて支部報に掲載された研究報告を発刊直後にホームページに掲載する仕組みづくりなど、これまでとは異なるアプローチで会員の獲得について支部活動の宣伝をまじえながら検討したいと思います。

最後に、ダイバーシティを尊重する支部会にしたいと思っています。一例としてはみなさまのワーク・ライフ・バランスを考慮して、支部会の開催日時や会議・懇親会の時間帯の見直しなど、より活動しやすいプラットフォームをこれから検討していくべきだと考えています。この点につきましても工夫を進めていきますので、ご協力・アドバイスをよろしくお願いします。

４．おわりに

過去の支部報をみながら、思いつくままに書かせていただきましたが、改めて先人たちのご苦労とそこから得られた成果の大切さに気付かされました。東北地域は、都道府県別の食料自給率が 100%を超える日本の重要な食糧生産基地であること、また農業のスマート化は東北支部のメンバーの得意とする学問領域でもあることを考えると、時代は今追い風と考えることができます。会員の方々のより一層のご活躍にご期待を申し上げる次第です。

以下は余談となりますが、2023 年度に向けた（一社）農業食料工学会の次期役員選挙が 2022 年 12 月に公示され、2023 年 1 月に実施されました。これに伴い、本東北支部の役員選挙は、その後に日程を延期して行われ、2023 年 2 月に次期役員体制を決定いたしました。本来「次期支部長の挨拶」は、農業食料工学会東北支部報の出版時期となる 12 月に「巻頭言」として掲載することを常としていましたが、このような事情でしたので、前支部長の張先生とも相談し本稿を 2023 年 3 月に執筆、4 月に公表する運びといたしました。